

精神薄弱児教育の諸問題 (3)

——*精神薄弱児教育の先駆者——

大 石 純 悟

1 精神薄弱児教育の黎明期

今日まで、精神薄弱児の教育の歴史を論ずる場合、しばしばギリシャ・ローマ時代の文献、聖書、コーラン、その他などから引用されるのが通例のようである。例えば、ギリシャ・ローマ時代には、スパルタで見られるように Lycurgus 法制のもとで、精神薄弱児は他の虚弱児と同様に戸外に遺棄されたり、川に投げこまれたりしたとか、古代ローマ法では、不具、虚弱児を殺すことが認められたが、精神薄弱児は人を喜ばす慰みものとして価値あるときは助命されていたとか。またコーランの第四章第四節に、マホメットが「理性なきもの」(those without reason)を引き取って養い、優しい言葉をかけてやることを教えているし、東洋では孔子が論語▲ の中で、知能の優秀なものと、特に劣っているものは、教育によって変えることはできない。平均以下の知能の持主には、よく気をつけて親切に指導するよう弟子に教えている、ことなどがあげられている。しかし、以上の引用から見ると、すでに古代から精神薄弱児の存在が知られていたことは理解されるが、こういう人たちの収容所や保護、訓練のために、何ら特別の尽力や組織的な努力が払われたという証明がない。ただ、彼等に対して思いやりのある言葉をかけているだけで、実際に保護され教育されるまでにはいたっていなかったと思われる。

とはいえ、早期の資料は甚だしく不足しているため——ほとんど無いと言ってよい——精神薄弱児の教育に関する事情が、研究者たちによって過大評価されている傾向がないでもない。例えば、Saint Nicholas Thaumaturgos は、マイラ▲ (Myra) の司教(四世紀に生存)であり、彼は精神薄弱者の保護者として述べられている▲▲。しかし彼は、すべての子供たちから船乗りたち、質屋さんに至るまでの守護神である。後世彼が Santa Claus の原型として奉仕するようになった事実から見

▲ 論語・雍也篇：子曰、中人以上、可以語上也、中人以下不可以語上也、

同上・陽貨篇：子曰、唯上知与下愚不移、

▲ Myra は小アジア南部、Lycia の古都

▲▲ このことについては Barr, M. W. : Mental Defectives. Philadelphia, Blakiston. Chapter II : History, 1904, pp. 24-77, 又は Lionel, S. Penrose : The Biology of Mental Defect. 1963, Chap. I, (秋山, 大田共訳：心身障害児の医学(1)―「教育と医学」第14巻6号, 昭41.

* この研究は、Leo, Kanner : A history of the care and study of the mentally retarded, 1964. を参考にしてまとめたものである。

て、精神薄弱教育の歴史上の人物としてあげる価値があるといえるだろうか。

同じような伝説は Euphrasia とか Eupraxia のように、種々な名前で記録されている 博愛主義の貴婦人の場合にも作りあげられている。彼女の夫君 Antigonos (コンスタンチノーブルの元元老議員で、ローマ帝国最後の皇帝 Theodosius の姻戚) の死後、彼女はエジプトの領地に移り、そこで厳格な修道女の生活に入り、若干の精神薄弱者を含む家なきものや障害のあるものを保護したといわれているが、これも確たる根拠がない。

このようなことは、大よそ古い年代史のどの文献にもよく見られる例である。

上述のごとく、古代の精神薄弱者に対する保護。教育については、かなり伝説的な色彩もあると思われるが、当時の人たちが精神薄弱と呼ばれたものたちに払った注意は、保護とか教育に関するよりも、精神薄弱という用語に多くの関心が払われていたようである。その代表的な人たちは辞書編集者たち (Lexicographers) である。

司教 Isidorus Hispalensis (ca. 560~636) は、精神薄弱という用語 “Fatuus” (ここでは adj. fatuous, n. fatuity) という形容詞を当て、その理由として二つの根拠をあげている。一つは、動詞 “fari” (to speak 話すこと) の分詞に関係がある。したがって、“fatuus” は「自分が話すことも、他人が話すこともわからない人」を指しているということ。第二の根拠は、ローマ神話の林野の神 “Faun” の妻で、予言者である “Fatua” の名前から出ているとする説である。彼女の予言力で麻酔状態 (stupefaction) にされた人が “fatui” (ボーッとになった人) といわれた。そこで、この “Fatui” というコトバが「意識なき」 (without a mind) すべての人に転移されて “Fatuu-” になったという根拠である。同様な結果と考えられる「愛している」という状態も “infatuation” (夢中にさせること) というコトバが当てられているが、これも “fatua” にその起源があるといえる。ローマ人が “amantes” (愛人、熱愛すること) を “amentes” (低能) と、語ろ合わせに作ったことも不思議でない。

もう一つのラテン語辞典の著者 Aegidius Forcellinus は、“fatuus” と “stultus” (愚かもの) を区別して、“stultus” は鈍感な感覚であり、“fatuns” は感覚のないもの、と記載している。また、全くの愚鈍 (mindlessness) に相当する特性は “amens” と同意語である。司教 Isidorus は、彼の辞書で、“amens” は全然意識をもたないが、“demens” は自分の意識の一部を持っていることを明らかにしようとしている。

また “idiot” (白痴) の用語が現在の意味に使用されはじめた時代を正確に定めることは困難であるが、ギリシャ語の “idiōtōs”, すなわち “private person” から出ていることは間違いない。従って、idiot は “the common man” (普通人) を意味するものであった。ところが、この “common man” が、専門的な知識のない「単純な素人」 (the unsophisticated layman) という意味に解され、それがつぎの段階で、idiot は「無知で知識のない人」 (an ignorant, ill-informed individual) を指すようになった、と理解される。Lionel S. Penrose は、社会人としての役割に参加でき

ない個人のことで、idiomやidiosyncrasy（医学では特異体質）も同じ語原のものである。もともとこの用語は、未熟、未教育、素人などの意味に使われ、17世紀までこの意味をもっていた、と述べている。

Imbecile（痴愚）の用語は、時代の推移と共に、同様な語義上の変化をうけたものである。当初、ラテン語の“imbecillis”（低能）は“bacillus”（棒）から出たもので、“弱さ”“薄弱”（weak）を意味したり、身体機能上の“弱さ”“衰弱”（debility）の状態の場合に使用されたようである。結局、imbecile は idiot よりも重くない精神の薄弱（weakness of the mind）に限定されることになったようである。

要するに、語原は実に不思議な細道を進んでいくものである。Faun の妻の霊験から fatuity へ、a private person の地位から idiocy へ、一般的な意味の frailty（もろさ、薄弱性）から imbecility（低能、痴愚）へと辿っている。

もっと奇妙なことは、医学書では決して使用されないが、精神薄弱の同義語として、しばしば使用される“Dunce”という用語の起源である。“Dunce”はスコラ学派の神学者で、1308年に死去した John Duns Scotus（1274～1308）からきたものといわれる。オックスフォード大学では、彼の門下生たちが支配的な一派をなしていたし、彼の著書である宗教学、哲学、論理学に関するものは、大学における教科書であった。ところが16世紀になると、彼の学派はまず人文主義者たちに、ついで宗教改革者たちによって、非難嘲笑された。この学派の人たちを Dunsians とか Dunses というのは、新しい学問（new learning）に対して罵倒したもので、Duns とか Dunce の名前は、すでに“Sophist”とか“hair splitter”（小理窟屋）といわれていたものが、すでに“学習に鈍感な、鈍い頑固もの（dull, obstinate person impervious to learning）”，また“学習できない馬鹿もの”（blockhead incapable of learning）の意味に移り変っていったと見られる。

古い文献から、さらにわれわれは、時に精神薄弱者が唯一の役割を果していることを知った。それはローマにおいて、家族やお客たちの慰みのため、ばか者（fool）や道化師（jester）を抱えたことは、当時の富裕者にとっては不思議なことではなかった。むしろ、あるばか者（fool）は非常に評判がよいものもあった。例えば、ローマの詩人 Martialis[▲] は、Augustus^{▲▲} 皇帝のお抱えのばか者（fool）Gabba は非常に評判が高かったと述べている。また、暴君ネロの先生であり、ストア学派の哲学者セネカ（Lucius Annaeus Seneca, B. C. 4—A. D. 65?）の書簡に——私の妻の愚者 Herpaste は先代の遺産であるが、私はこのバケ物が嫌いである。従って、妻は盲目であるが、家の中は暗いと称して妻を外へ連れ出している——という、fool の忠実な下僕の様子をのべている。

後世、これらバカ者たち（fools）は、フランスにおける“fous”または“bouffons”（道化者）、ドイツにおける“Hofnarren”（宮廷道化師）のように、王侯や宮廷の“慰みもの”（plaything）と

▲ Martialis, Marcus Valerius (A. D. 40—102?) はスペイン生れのローマの風刺詩人

▲▲ Augustus 皇帝はローマ最初の皇帝 (B. C. 27—A. D. 14)

なった。(fou と fool のコトバはラテン語 follis が語原で、follis は一對のフイゴ a pair of bellows で、fou は片方のフイゴを意味している。複数の folles はプップッと息を吹く両頬を意味する) このほか者の道化者は、不恰好な身体をした人とか精神薄弱者から召し抱えられた。Moreau は、道化者 (the bouffons) の大部分が imbecile (痴愚) であったし、また、このコトバを認めた科学的医学的な意味では、精神の弱さ “faibles d’esprit” のあったことを強調している。

このように、精神薄弱者の道化者の中には、名声を博したものもあり、伝記作家から賞讃を得たものもある。フランス国王の Francis 一世 (1494—1547) の宮庭内での “Triboulet” や “Brusquet” の名前、それに Soxony 王国の知者フレドリック公 (Duke Fredrick, 1463 —1525) の側近の人たちを楽しませた Klaus Narr の名前は、今なお百科辞典[▲]に記載されている。フランスのチャールス五世 (Charles V. 1337—1380) の時代には、フランス北東部の Champagne 地方は、宮廷にバカ者 (fool) を供給する独占権を授与されたといわれる。

偉大な天文学者 Tycho Brahe (1546—1601) は、新しい友として痴愚者の “ささやき” も神の啓示として耳を傾けたという伝説がある。彼がユダヤの律法典 Talmudic の一節に (Baba Bathra 12. a) “聖殿の破壊の時より、予言者の術はその価値を失ない、愚者に授けられた”

と、のべていることを知っていたとは思われないが、この一節は、愚者は予言者である、ということになるであろう。

勿論、保護されたばかり者は、精神薄弱者やハンデキャップ者の中で、例外的な地位を占めたものである。しかし、大多数の idiots や imbeciles たちは、必ずしもそうであったといえない。多くの未開地域において、彼等は迷信的に祝福された “よき神の子” (Les enfants du bon Dieu) として見られたり、また苦しめられることはなかったが、放浪するがままにすておかれたようである。

精神薄弱者たちが最悪の状態にあったのは、16世紀から18世紀における宗教改革や啓蒙期時代の期間中であつたといえる。精神薄弱者の多くは、当時の魔神信仰 (demonism) の犠牲者となった。マルチン・ルッター (Martin Luther 1483—1546) は、神の加護なきものとして精神薄弱者をのべている。彼の食卓談話 (Table Talks) の中に、その報告がある。

“8年前、Dessau (東ドイツの都市) に一人の精神薄弱児がいた。彼は12歳で眼もその他の感覚も異状はなかった。しかし彼は、農夫や脱穀者の4人分をガツガツ食べる以外は何もしなかった。彼は物を食べ、脱糞し、よだれを流し、もし誰かが捕えようすると金切声を立てた。物事がうまくいかないと泣いた。そこで私は Anhalt 王に言った。 “もし私が君主であれば、この子供を Moldau (Dessau の近くを流れる川) 川に連れて行って、溺死させる” といった。しかし王は私の忠告に従わなかった。そこで私は “キリスト教徒は、教会で主の祈りを捧げ、主が悪

▲ Brockhaus Konversation—Lexicon, v. s. Hafnarr..

魔を払い去ることを祈るべきである”といった。この祈りが Dessau で毎日行なわれた。この馬鹿な子供は翌年死んだ。ルッターは、彼がなぜそのような忠告をしたかを尋ねられると、彼は断固として、このような馬鹿な子供は、精神のない、単なる肉の塊、すなわち *a massa carnis* であるという考えであると答えた。なぜなら、肉の塊は、理性や精神をもつ人たちを墮落さす悪魔の力である。その悪魔は、馬鹿な子供の精神に宿っているからだ。

このように、ヨーロッパ中世期には、他方では精神薄弱者たちは宗教改革者たちによって無残な処遇を受けていたことも知られる。ところが医学は、この問題について長い間全く沈黙を守っていた。18世紀の終りまで、医学的文献と称するものに、精神薄弱に関する資料は殆んど見られない。Weygandt, W. が、白痴や痴愚に関する古典の論文を紹介している中に、古の学者は特別な精神病の状態を生き生きと正確に記述している——例えばテンカンの Hippocrates や躁鬱病の Aretaeus のように——ところが、白痴はごく最近まで稀れにしかのべられていなかった、とのべている。精神医学、神経学、それに心理学の領域で発表された文献を探すのに、Heinrich Laehr の1459年から1799年までの編集に誰れもが注意を払っているものである。しかしこの立派な収集も、中世時代の終りの方で *cretinism* に時々関心が払われている以外は、精神薄弱についてわずかに間接的引喩があるだけである。

II 精神薄弱児教育の先駆者たち

精神薄弱に対する関心は、フランス、スイスからヨーロッパの文明地域やアメリカに拡大し、19世紀の前半にパッと燃え上ったと見られるであろう。この時期になって、その当時まで不当な圧迫を加えられたり、軽視されていたものたちの立場を、強く支持する代弁者たちが現われた時代となったともいえる。しかし、フランスにおける白痴訓練の最初の先駆者が、聾啞者の施設でその研究を進めたり、アメリカにおける白痴の最初の“実験学校”が、盲人の施設に設けられたことなどを考えると、精神薄弱児教育に対する関心は、盲聾教育に関連して起ったものと思われる。従って、早期の精神薄弱児教育の後援者たちは、Jacob Rodrigues Pereire や彼の聾啞者教育の業績から、多くの感化を受けたことは有意義なことである。

精神薄弱児に対する最初の探索的研究は、当時の定評ある権威者からも奨励されなかったとはいえ、20歳半ばの熱心な青年たちによって着手された。勿論、教育に対して懐疑的であったことは事実としても、友情や良き指導者に支えられて、イタル (Itard, J. M. G) はピネル (Pinel, P.) の優れた判断によって進めたし、またセガン (Seguin, E. O.) はエスキロール (Esquirol, J. E.) の温情に感激した。Itard はアベェロンの野生児 (*le sauvage d'Aveyron*) を、初め普通の生活に導入しようと試みたり、グッゲンビュール (Guggenbühl, J. Jacob) は、クレチン患者 (*cretin*) を“治療する”ことから出発した。いずれも失敗に終わったが、しかもなお、他の人たちによって、まもなく西方文明をとり入れた方法や施設が開設し発展していった。

これら全ての運動は、精神薄弱児とともに、教育的社会事業的な仕事をはじめた人びとの、パーソナリティや個人の努力の報告なしでは、十分に評価することはできないであろう。従って、以下精神薄弱児教育に熱情を傾けた先駆者たちの人と業績について考察したいと思う。

(1) Jacob Rodrigues Pereire (1715—1780)

Pereire は、スペインの Estremadura にある小さな町 Berlanga で1715年4月11日に生まれた。父の死後、母は異教に改宗したため、その責めから逃れるために子供たちとともに、フランスの Bourdeaux に住みついた。Pereire は解剖学と生理学を学び、積極的に先天性の聾啞者の教育に興味をもつようになった。従って、彼を精神薄弱児教育の先駆者にあげることには問題はあるが、彼の聾啞教育への熱情が精神薄弱児教育の研究者に多大の激励と感化を及ぼした点で見逃すことのできない人物である。彼は 1747年1月19日、カーンの王立純文学アカデミー (Academie Royale de Belles Lettres) に、聾啞教育の方法を提出し、彼の努力に対して身に余る称讃を受けた。1749年6月11日、彼はパリーの科学学士院で、Buffon▲ を初め、並み居る名士の面前で彼の研究結果を実験した。聾啞者が本を読み、ものを言う前例のない実験を観察した皇帝ルイ 15 世は、Pereire や彼の弟子に下問されるほど感動された。Pereire に敬意のしるしとして年金800フランが下賜された。

その他 Pereire が、多くの尊敬と名声を高めたのは、大きな帆船で風的作用を最も効果的に利用する方法を考察したこともあるが、何よりも彼の聾啞教育における大きな功績の一つは、簡単にした記号言語 (sign language) を教えたことである。これが Pereire の指話法 (dactylologia) である。また、計算する方法を教えるため、算数機械を発明したことなどである。

彼の忍耐、努力、それに勇気は、他の人に対する模範、特に盲人や精神薄弱者に対する教育的可能性に関連する手本となった。Pereire は、知的に欠陥のある人と直接、接触することはなかったが、彼の聾啞者に対する研究は Itard や Seguin に多くの刺激を与えた。Seguin は、機会あるごとに、Pereire に負うところのあることを述べているし、また彼の論文にも多く述べられている。Barr, M. L. は、無条件に “Pereire, Itard なしでは不可能であった。”と断言している。

Pereire は、1780年9月15日パリーで亡くなった。彼の遺体はモンマルトル (Montmartre) の墓地に葬られた。

(2) Jean Marc Gaspard Itard (1774—1838)

Itard は フランス南東部の Provence の Oraison に生まれた。「アベェロンの野生児」教育のための彼の努力によって、精神薄弱児教育の傑出した先駆者の一人としてあげることができる。

Itard は、実業的な職業に入るようになっていたが、彼が安定した職業に就く年令に達した当時

▲ Buffon : George Louis Leclerc Buffon, (1707—1788) , 伯爵で、博物学者。

は、フランス革命のさ中で、まさに興奮の坩堝の中にあった。彼の生まれた地方は戦乱の中にあったため、徴兵を避けるためにも彼は、陸軍病院の補助外科医としての資格を得た。彼は自分の仕事に没頭するとともに、熱心に医学の研究を続け、間もなく医師としての名を揚げた。彼がパリーの聾啞者施設の医局員として勤務していた頃、彼の最初の主要な任務が入所者の訓練であった。従って彼の興味は、聴覚や言語器官の科学的研究へ向けられた。耳の疾病に関する彼の論文は、1821年に発表され、現代耳科学の基礎を築いたものとして、歴史的出来事と見なされている。

Itard が25歳で、その職について間もなく、おおよそ11, 2歳の少年が、Aveyron の中央学校の博物学の教授 Abbé Sicard Bonnaterre によって施設に連れてこられた。この少年は Victor とか Juvenis Averionensis と言われているもので、当時の哲学者たちの空想を刺激した。この少年の生い立ちや生捕りの方法などについては種々異説がある。P. J. Virey の辞典に報告されているところによると、この裸の子供は人間を見て逃げ出し、食物のために木の根や木の実 (acorn ドングリ) を探して、Tarn 県のコーヌ (Caunes) の森をさまよっていたと思われる。彼は一度は捕えられたが、すぐに逃げ出した。1798年、少年は3人の猟師に再び捕えられ、コーヌへ連れてこられたが、また逃げ出し、厳冬の寒さに曝されて6ヶ月間、放浪者のような生活をした。ある冬の日、少年は St. Sernin 市の郊外にある染物屋の家に入ってきた。半年前に着せられていた名ごりしかないシャツを着ていた。その家の人は、じゃがいもを与えたが、あたかも栗やドングリの実のように、生で食べた。他のどんな食べものも彼は食べなかった。彼は一語も言語を話さなかったが、言葉にならない音を発音した。彼は自然の呼び声で答え、また慎しみの観念は全くなかった、とのべている。

この少年は、初め St. Afrique 収容所に入れられたが、その後、博物学者 Bonnaterre に引き渡され、ついで Itard のもとに連れてこられたものである。少年については、種々な見解があった。ある観察者たちは、この少年を[・][・][・][・]食わせもの (swindler) であるといっている。当時有名な精神科医 Philippe Pinel は、少年の検査後、この少年の野性は[・][・][・][・]まやかしたもの (fake) であるし、また、“家畜に劣る不治の白痴” (an incurable idiot, inferior to domestic) であると判定した。なお他の人たちは、Rousseau のいう“自然のままのすがた” (natural existence 自然人, 自然的存在) の見本の代表であるかどうか疑問をもっていた。少年の外観はかなり論争の焦点となったが、原野や森の中で野性的な生活をした後で発見されているので、その当時までに報告されている野生児たちと比較されたりした。それら野生児たちには動物によって育てられたものも多かった。勿論、資料の信頼性については疑問もあるが、Carl Linnaeus (1707—1778) はいろいろな人間として10種類をあげ、それらは、いずれも ferus (野生的), tetrapus (四つ足で歩く), mutus (ものを言わない), hirsutus (毛深い) な人間であるといっている。Linnaeus のいう10種類の人間とは

i. Juvenis lupinus Hessensis.

(ヘッセの狼少年, 1544)

ii. Juvenis ursinus Lithuanus.

(リシアニアの熊少年, 1661年)

iii. Juvenis ovinus Hibernius.

(アイルランドの羊少年, 1672年)

iv Juvenis bovinus Bambergensis.

(バンベルグの牛少年, 年代不詳)

v. Juvenis Hannoveranus.

(ハノーバアーの少年, 別名を “Wild Peter” 野生のピーター, 1724年)

Hamelm の町で発見, 1726年にロンドンへ連れてこられて評判となった。国王 George 一世は Walse の当時の王女に彼を献上した。その王女が後の Corolin 女王となった)

vi. Pueri Pyrenaici

(ピレネーの幼児, 1719年)

vii. Puella Transisalana

(トランシィサラナの少女, 1717年)

viii. Puella Campanica

(カンパニアの少女1731年)

ix. John of Liège (or Johannes Leodicensis)

(リエージュのジョン, 年代不詳)

x. Puella Karpfensis

(カルフエンの少女, 1767年)

などをあげている。

野生の子どもたち, あるいは野育ちの子供たちへの興味は, その後も薄らぐことはなかった。1920年10月17日, 印度の Midnapore 附近の密林中の狼の洞穴から保護された Kamala と Amala の話題は, 最近評判になったものである。“野生人” (feralman) についての大規模な文献研究としてあげられるは, R. M. Zingg の “Wolf children and Feral Man, New yrok, Harper, 1939” がある。

さて, Aveyron の野生児 Victor が Itard のもとへ連れてこられた時, この若い医師は, Pmel の診断による不可逆性 (irréversibilité) の予見を認めることはできなかった。Itard は, この少年は社会的教育的に無視されたため, 精神的に発達が停止をうけ, 孤立によって白痴となったものであり, 一種の不使用からの精神的退化 (atrophie mentale) となったものと信じていた。Itard は, “野蠻から文明へ, 自然生活から社会生活へ” 少年を移すことを試みた。そこで Itard はこの少年の教育に, 五大目標を設定した。

1. 少年が最近までつづけてきた野生の生活によく似たことをさせ、この少年により適した社会生活をさせること。
2. 種々強力な刺激を与えて、少年の神経の感受性を興奮させたり、観念の生の印象を与えること。
3. 新しい欲求を起させたり、周囲の世界との関係範囲を広げることによって、少年の観念を拡大すること。
4. 模倣せざるをえない必要性をつくって、コトバを使用するように仕向けること。
5. 成長にともなう身体的欲求を満足させるように適応させ、それから教育の目的に自分の知能を適応さすように仕向けること。

Itard は五年間努力した。しかし、彼は自分の目標を達成させることはできなかった。この少年が、思春期の“野性的な情熱の暴風雨”を起した時、Itard は自分の使命を果し得ないと感じて断念することにした。Victor は長年、管理保護のもとに生きていたが、1828年 遂に死亡した。

しかし、フランス科学アカデミーは、Itard の努力を賞讃するばかりでなく、その少年が、初めはものを言わず、四肢で歩き、地面に四つん這いになって水を飲み、自分の行動を妨げるものにかみついたり、引っ掻いたりしていたものが、著しい変化をしたという事実を賞讃した。少年は物を認知し、アルファベットの文字を見分けたり、多くの単語の意味を理解したり、物や物の部分にその名前を合わせたり、比較的すばらしい感覚的識別をしたりすることを学習したり、また野生の孤立した生活より文明の社会生活へなれさせた。アカデミーは、Itard が教育科学に積極的に貢献したことを認めた。すなわち、Itard は重度の精神薄弱でも、適切な訓練によれば、ある程度まで改善させることができることを証明した。

アカデミーから出された声明の一部には、アカデミーは、彼の授業、練習、実験に、これ以上の英知、明敏、忍耐、勇気を要求することはできない。また、彼がすぐれた成果をおさめられなかったとしても、それは不熱心とか才能が足りなかったことによるのではなくて、働きかけた被験者の器官の不完全な状態によるものと思われる。さらにアカデミーは、Itard がなし得た限りでの成功についても目を見張っているし、また彼の努力の真価を評価するためには、その子ども自身だけで比較されるべきであると思う。その少年が、医師 Itard の手に委ねられた時はどうであったかを思い出し、現在その少年はどうであるかを見る必要がある。そして、多くの新しい工夫に富んだ教育方法によって、このギャップは埋められていった。Itard の報告書は、すばらしく明敏な観察による、きわめて珍らしく興味の深い現象の、一連の解説を含んでいるし、学問に新しい資料を与え、少年の教育に従事するすべての人々に、きわめて有用な知識を与える授業過程の結びつきを提示している。

という内容のものを発表している。

(3) Johann Jacob Guggenbühl (1816—1863)

Guggenbühl は、1816年8月16日スイスの Zurich 湖のほとり Meilen で生まれた。医学生の時、医師であり哲学者であった Ignaz Paul Vitalis Troxler から説明された cretinism (クレチン病) に興味をひかれた。Troxler は、クレチン病を一種の風土病的な人間の変性と論じ、この病気に罹患しているものに、何らかの方法がとられてもよいとのべた。1836年、20歳の Guggenbühl は、Uri 州の Seedorf の村を通った時、路傍の十字架の前でブツブツ言いながら神に祈っている馬鹿づらををした、背の小さい、びっこのクレンチを目のあたりに見て、強く心を動かされた。彼は近くの小屋までその男に従った。小屋にはびっこの母親がいた。彼女は、この子は幼少期に祈りを教えられ、それ以来どんな天候でも、毎日同じ時刻にきまってその十字架の前で祈りを捧げに行っていることを話した。彼女は極めて貧しいため、彼にそれ以上の教育をうけさせることはできなかったし、また年毎に悪化する彼を見つめながら、空しく坐していると付け加えた。この若い医者は、一貫した徹底的な訓練をうける機会があれば、もっとよくなるのではないかと考えた。彼は白痴の子供たちに、どのような改善された努力を払っても、全く効果があがらないという従来の考え方をしなかった。彼は、クレチン病に関する文献を入念に調べ、症候学や病因学に関する論文を多く発見した。ところが、治癒的な試みの可能性については一言も発見できなかった。

Guggenbühl は、彼の生涯をクレチン病の治療と予防に捧げることを決意した。当時、世界中で精神欠陥児の教育と医学治療のための居住施設 (residential arrangement) はどこにもなかった。二三の初歩的な試みは、遠く彼の理想に及ばないものであった。しかし、Guggenbühl は失望しなかった。彼はクレチン病の状態、出現、その原因について、できる限りの観察から学ぶため、クレチン病の影響をうけている地域へ幾度も訪れた。さらに彼は、治療経験を徹底的にするため、Glarus の Kleinthal に普通の開業医として定住した。彼はそこで、適切な環境内での居住治療は必要欠くべからざるものであるという結論に到達した。彼はまた、教育分野における経験を必要とすることを悟って、28歳の時、1799年に設立された Hofwyl にある代表的な教育施設の設立者 Philip Emanuel von Fellenberg を訪れた。

Fellenberg に激励された Guggenbühl は、患者たちから望まれながらも開業を断念し、1839年施設設立の仕事に着手した。“神は私に、もう一つの道を選びたもうた。私は神の声を聞かねばならない。”として、多くの人に救いもたらす準備に入っていた。

彼の理想には批判もあった。Berne の新聞は特に辛辣であったし、軽率な幻想としてその計画を嘲った。そこで Guggenbühl は、権威ある支持をうるべきであると感じ、“Christenthum und Humanität im Blick auf den Cretinismus” と表題をつけた感動的な請願を、スイス自然科学学会 (Schweizerische Naturwissenschaftliche Gesellschaft) へ提出した。この学会は、つぎのような審議の結論を下したといわれる。

“確かにクレチン病が固定しない幼少期に、この哀れな病気に治療を進めることは非常によいことである。Guggenbühl 博士の学識と熱意は、彼が計画する病院の院長となるのであれば、この事業の成功を保障するだろう。”

この計画は、刑務所や救貧院をコロニーに代用させることを主唱してきたスイスの森林学者である Karl Kasthofer (1777—1853) の注意を引いた。彼は施設生活の耕作と今後のコロニー化 (colonization) は、高い山岳地域で可能であることを明らかにした。谷間に多いクレチン病は、高地ほど多発していることが知られていなかったことを考えて、頂上から1000フィート、海拔4000フィート以上あるベルン州内の Interlaken 市の近く Abendberg に40エーカーの土地を Guggenbühl に提供した。まもなく南の斜面には住宅が点在するようになり、月々の奉仕は Diakonissen すなわち慈善伝導修道女団 (Evangelical Sisters of Mercy) によってなされた。そこは、大集会ホール、遊戯室、入浴設備のある中央館があるし、その他の建物は付添人や教師たちのための訓練所として計画された。

Guggenbühl は、あらゆる有益な手段で患者たちを更生させるため全力を傾注した。彼は第一の必要条件として、清らかな山の空気、それに当時の自然美との治療効果を、詩的なコトバで激賞した、文字通りの新ロマンチズム (neo-romanticism) を考えた。彼は、よい食事といわれるものは、山羊のミルク、白パン、タマゴ、野菜、米、それに若干の肉であるということに注意を与えた。彼は入浴、マッサージ、それに身体的訓練による体の治療に重点をおいた。また種々の薬物治療、特にカルシウム、銅、亜鉛などの調理を試みた。同時に感覚的な知覚を発展させるため、原始的な興奮を起こさせ、そこからより洗練された、またより複雑な刺激へ進歩させようとした。彼は“不死の魂は、本質的に人として生まれたあらゆる創造物に同じようにある。”という確信をもって進めていたし、また規律的な日常生活、記憶の訓練、それに話しコトバの訓練などに慣れさせることによって、患者の魂を目醒めさせようとした。

このような仕事は、大きな改革として、あらゆる所で歓迎された。クレチン病の発生しない地域でさえ、その熱意が高まったことは、一見奇妙な感がある。しかしこの当時は、クレチン病と白痴、痴愚の類を同じものと見ていたし、その差別は、その程度、奇形の有無にあった。従って、Abendberg の方法では、あらゆる精神薄弱児たちにも適用されるものであった。

Guggenbühl の名声は、たちまち文明諸国に広がった。彼は多方面の旅行で、自分の考えを普及させたり、また多くのパンフレットに Abendberg を公表したりして、物質的に補助されたことも事実である。彼は、好意的な有名人からの保証をうけることには躊躇しなかったし、また彼の通信には、これら有名人への讃辞を惜しまなかった。有名なオーストリアの詩人、医師、哲学者、それに教育改革者である Ernest Freiherr von Feuchtersleben の通信文を引用したりした。すなわち

“つぎつぎに送ってくるあなたの簡単な報告は、この仕事についての啓蒙を必要とする一般大衆に有益なことであるのみならず、非常に必要なことである。報告の内容は、大衆の注目を引き

たり支持を得たりするため、心や考えをつかむ関連のある目的をはたすため正しいことである。Abendberg は、確かにこの重要な問題に関して、あらゆる努力と研究の中心として見られねばならない。幸多く、この仕事を続けられんことを！”

また Guggenbühl は、Bonne の精神医学者 Christian Friedrich Nasse (1778—1851) からの、つぎの通信を多くの読者に紹介している、

“貴殿が事業をはじめて以来、私はうれしい思いで、その成りゆきをながめてきました。……私は、貴殿の情深い施設の目的が立派に成功するだろうことを確信しています。これら病人を救けようとする思いが誰れにも起らない間に、希望もなく生き続けている多くの不幸な人たちに、決定的な第一歩を歩み出させることは、まことに価値のあることであります。”

かくて Abendberg は、各国からの医師、慈善家、作家たちの参観地となった。彼等は帰国すると、すぐさま輝かしい報告を発表した。ベストセラーの小説や旅行記の著者である Ida Hahn-Hahn 伯爵夫人 (1805—1880) には、精神病的な夫との離婚の年に生まれた白痴の娘がいた。彼女は Abendberg のことを聞き、その地を訪れ、非常な感動をうけ、相当な金銭上の寄付 (7,500 スイス・フラン) を行なった。1843 年、彼女はベルリンで一冊のパンフレットを出版した。また、Samuel Gridley Howe は、アメリカに最初の白痴の施設を Massachusetts に設立しようとして、Abendberg を視察した。彼は Abendberg に圧倒されてつぎのようにのべている。

“The holy mount it should be called!”

(それは聖なる山と呼ぶべきだ！)

と。事実、訪問者の多くは、ただ Guggenbühl を称讃するだけでなく、それぞれの国の政府や市民に、同様な施設の建設を力説した。

Sardinia の王である Savoy 家の Charles Albert は、本国におけるクレチン病の研究のため委員を任命した。1848年に発表された報告によると、Abendberg はモデルとして推せんされ、Guggenbühl は“不幸なクレチン病患者の最も尊敬する憐憫の情に感動させられた”人としてのべられている。ゼノア (Geneva) の精神病医である Louis-Ander Gosse (1778—1851) は、同年に、同様に Guggenbühl を、“われわれは、彼の純粋な考えや真実の主張に確信をもった。”と認めている。

Guggenbühl は、特に英国において相呼応するかの如き反響を知った。Abendberg は、1842年 9月4日、William Twining の訪問をうけた。Twining は、帰国して発表した論文の中で、

“人間の尽力によって、心は、明らかに感覚なきものたちを目醒めしめるし、また教育も、教える望みなきものと考えられたり、仲間たちと交わることができないと考えられていたものたちに拡大されるだろう。これから一世紀の間に、全ヨーロッパからクレチン病を根絶することになったと記録されるなら、スイスの歴史上、輝かしい光栄あるページとなるであろう。”

と賞讃をおくっている。

上述の知名人の讃辞からもうかがえるように、Guggenbühl は、この時代における国際的な有名

人となっていた。彼の国際的地位は、Swiss の自然科学会、Zurich の外科医学会、Vienna の王立医師会、Turin の医学会、St. Petersburg のロシア医学会、Bonne のライン自然科学と医学会、Erlangen の医学会、Baden の国立医学会、Marseilles の国立医学会、Strassburg の医学会、などの名誉会員や客員となっていることによってもうかがえる。したがって、Abendberg のイメージを型どり、また Abendberg で訓練された人たちを職員とした施設が、ドイツ、オーストリア、イギリス、ネザーランド、スカンディナヴィア諸国、アメリカ、その他の国で設立された。Guggenbühl は、諸処へ講演をしたり、相談をうけるために出かけて、尊敬と崇拜の祝辞を受け、これまで顧みられなかった一部の人たちに、新しい生活の福音をもたらした人として知られるようになった。

しかし、Guggenbühl に対しては、最初から批判の声もあったが、長い間の各方面からの讃辞によって溺れさせられていた。Auzouy, M. は、当時のことについてつぎのようにのべている。

“幾人かの非難する人があっても、これらの人たちは、輝かしい彼の栄光の前には、とるに足りないものばかりであった。”

(“S’il eut quelques d’etracteurs, ceux-ci ne furent que de légères touches dans le soleil, brillant alors tout son éclat”)

国王、有名な作家、医者、宗教改革者、それに知名の士は競って彼の栄誉をたたえた。しかし、ある人たちは、Guggenbühl があまりにも多くのことを約束し過ぎると感じた。彼はほとんど、自分の意志を神の意志と同一視し、誇張した感動的態度の興奮があった。従って、彼が医学研究誌に発表した論文に、“スイスは、祝福された理想実現において、他の国より先きに異彩を放つよう神の国によって選ばれた。”というようなことを導入しているし、また、神の慈悲深い奇蹟の一つとして Abendberg が与えられ、自身奇蹟を行なう選ばれた人としてのべている。

結局、白痴の子供たちは彼ののべているような方法では治癒することはなかった。人びとの不満は、見る間に Guggenbühl に対する憎悪に転化した。彼は擁護者たちがますます少なくなっていくのを知った。1853年の初め彼は、自分の星が天空にしっかりと座位を占めることのできなかったことを知りはじめた。彼の決定的な挫折感となった最大の力は、かつて英国の大臣だった Gordon が、首府 Berne にきたときである。Abendberg には、2、3人の英国の患者が収容されていた。Gordon が彼等を訪ねたのは1858年4月13日のことである。Gordon は、無視されたような最悪の状態にある子供たちや、胸の悪くなるような悪い設備の全施設を見た。彼が一人の子供に寝室を見たいといった時、その子供は“部屋に入るカギを置き忘れた”と答えた。Guggenbühl はその時、前年（1857年）の11月から長期の旅行に出ていたので留守であった。Gordon は、ベルン州の当局に自分の印象を報告した。管理不行届の噂は、しばらくの間に広まっていった。以前からの崇拜者の多くは、彼の保証を撤回した。Gordon の申し立てには、特に不愉快な出来事があった。一人の患者が崖から落ちたが、患者の失踪は農夫が暫くたってから、その死体を発見するまで気づかずにいたこと。また一人の子供が死亡したとき、棺を作るために呼び寄せられた大工が、腐敗した状態の死体

を見たと言ったことなどであった。従って Gordon が憤りを表明した時、州当局は、直ちに Vogt と Verdat の 2 人の医師に公的な調査 (April 20, 1858) を命じたことは当然である。“Des Abendberg wie er ist” のパンフレットに、これらの公的に、作成された真相がのべられている。

1. Guggenbühl は、自国や他国で、彼の施設をクレチン療養施設 (Kretinen-Heilanstalt) と呼んで、多くの人を欺いていた。クレチン患者は収容者中、精々 $\frac{1}{3}$ であった。彼はクレチン患者を癒せるものとしているが、それは密かに普通児を入所させているからだ、とまでパンフレットは非難している。
2. 普通児たちは、Abendberg に収容されて、公立学校に登校させなかった。
3. ただ一人のクレチン患者も、Abendberg では治療したことがなかった。
4. Guggenbühl は、はじめ幼児のクレチン患者を収容するようにのべていたが、23歳までの人を収容していたし、また 5 歳以下の幼児は一人もいなかった。
5. 医学的な監督が行なわれていなかった。所長は毎年 5 ヶ月から 6 ヶ月間留守であったし、また代理者を置いていなかった。
6. 最初 Guggenbühl は、十分訓練された指導員を採用したし、彼等の中には、他の新しい施設に移って立派に仕事についているが、Abendberg は、数年間一人の教師もいないままであった。調査の時には、所内に無知な農婦が 2 人しかいなかった。
7. 暖房設備、栄養、水の補給、寄宿舍内の換気、それに衣服は不適當であった。
8. 所長は、施設に寄付された書物もなく、誰れから受けたかの明細な説明もできなかった。
9. 患者の治療進行状況に関する記録は保管されていなかった。

このパンフレットは、Guggenbühl が純粋な利他的愛情の計画から始めたものであることを認めているが、クレチン病と、神聖な原因による誤った殉教者気取り、治療結果の潤色、それに宗教的情操の利己的利用とを結びつけようとする虚栄心によって、間もなく不純なものになったことを遺憾としている。

調査の結果、スイス自然科学学会は、その後援と支持を撤回した。Abendberg はその後、ヨーロッパやアメリカの各地に施設が設立され始めた頃に、一時閉鎖された。

Guggenbühl は Montreux に引きこもって、未婚のままただ一人暮らした。その末路は不遇であった。彼の末期は、ウィーンの医学研究誌 (1860) やベルリンの医学研究誌 (1862) に短い論文を発表したにとどまった。1863年 2 月 2 日 Guggenbühl は年令 47 歳をもって示寂した。Abendberg は、1867年に売られ、避暑地のホテルに姿をかえた。その後、19世紀における Encyclopædia には、その地に酪農場の設立されたことを記載している。

Guggenbühl の Abendberg 経営は、失敗に終わったことは事実であるが、彼の著作を熟読すると、疑いもなくクレチンの治療の可能性に、真心こめた信念を書きつづっている。しかし彼の信念は保証されなかった。彼の旅行は、必要な管理的責任感をそらせることになったのであろう。彼の不在

中は継父に委ねられていたが、長期にわたる不在の間に、その地位を失墜することになったと思われる。

しかし、Guggenbühl は、精神薄弱児のための施設保護の考えと実践の先駆者として認めねばならない。今日存在する数百の施設は Abendberg から派生したものである。

以上の点から Guggenbühl に対する態度は、三つの段階を経てきている。その第1段階は、1840年から1850年の中頃までで、その時代の優れた医学者やその他の科学者たちによって与えられた崇拝に近い賞讃に値する人物であった時期、第2段階は、約20年間続いた“欺瞞でなかった”いわゆるクレチン療養所 (Kretinen-Heitanstalt) と、詐欺師、ヤブ医者、山師、横領者、偏屈者などと創設者の人格を傷つけるような記事で満たされた時期。第3段階は、憎悪が冷め、歴史上の彼の地位が、最初の偶像視でなく、また衰えることのない非難でなく、きびしく評価されることになった時期である。このような態度は、つぎの二つの引用によって最もよく例証されるであろう。すなわち、Heinrich Mathias Sengelmann 師 (1821—1899) は、Guggenbühl の事業の簡単な要約の後で、

“その人間について判断を下すべきでない。弦の糸がその強さ以上に張られた。多くのことが約束され過ぎた。……彼の穏健な判断を弱くしたのは、追従のお世辞であった。これに加えるに、彼が Abendberg からのたび重なる不在の間に悪弊が生じていたことである。後になって、ひとたび疑惑が生じると、初め寛大な態度で黙許されていた彼の宗教的意図も、これらの悪弊の源泉として見られるようになり、彼は不当に偽善者として印象づけられた”。

また、1904年、Martin. W. Barr は、先導者としての Guggenbühl の意義に、尊敬を回復するため最善をつくした。Barr は、

“彼の方法を吟味して見ると、概して近代経験の要求に合っているし、また近代経験によって是認されているので、われわれはクレチン病そのものの献身的な研究において、この人によって得られた深い識見は認めないわけにはいかない。ただその識見は詳細であるばかりでなく、広範囲なものでなければならない。彼は比較的狭い範囲で苦心努力したし、また今日の大規模な施設であるコロニー計画を予想したことは、賞讃されねばならない。歴史は、Guggenbühl が一つの仕事に彼の生涯の最良の歳月を捧げたことで、先駆者たちの中に彼の名前を位置づけるための仕事を、遅まきながら果たすだけである。”

(4) Edouard Onesimus Seguin (1812—1880)

Seguin は、1812年1月20日にフランスの Clamcy で生まれた。彼は Auxerre の高等中学校とパリーの St. Louis 高等学校を卒業し、ついで Itard のもとで医学や外科医術を研究した。Itard は彼に、白痴の研究と治療に献身することを勧めた。彼は Itard に十分な恩義を感じたが、個人的な人間関係を越えて研究を進めた。当時は、たしかに彼を勇気づけた良き指導者や白痴教育を支える

原理の必要性を感じた。精神病医の指導からそれを期待することはできなかった。彼が指導を求めた偉大なる精神病医 Jean Etienne Esquirol は、“最短期間でも、不幸な白痴に理性や知性が授けられる方法がないため、教育的努力は無駄であると”宣言された。

このような悲観論にも意気を阻喪させなかった Seguin は、25歳の1837年に、一人の白痴少年の教育にとりかかった。彼はその白痴少年が“自分の感覚器官をうまく使用することができ、記憶することや話すこと、比較すること、算えることなどができるようになる”までの18ヶ月間、着実にたゆまず努力した。Esquirol は、この冒険的な試みの成功を証言する第一人者であった。1839年8月18日、彼は (Esquirol) その白痴少年を“白痴のように思われる子供”(un enfant...semblable à un idiot) とのべることによって、微妙に自己の立場を弁護しながら、Seguin の功績を認めた声明を出した。もしわれわれが、白痴に何も指導することができないと決めた場合でも、白痴の状態が改善されたならば、それは“白痴らしいもの”(a seeming idiot) であったということによって、顔を立てることができる。そうでなければ Esquirol は、“望ましい教育体系を立案することのできる”人として、Seguin を是認する声明文を結んだであろう。

Seguin は、廃疾者救護所 (L' Hospice des Incurables) や Bicêtre の収容所で、多くの子供たちを治療し始めた。1842年10月2日、パリーの病院管理協議会の開会で、Seguin の努力の結果を報告するように命じた委員会で、

(1) Seguin が廃疾者救護所で、非常に効果的に適用されている教育方法を続けることを求めるべきであること

(2) 救護所長や精神病医は、Seguin によって使用される方法の進展や結果に従うべきことなどを決定した。

1843年12月11日、Serres, Flourens, Pariset などからなる委員会は、Seguin の業績の詳細な検査報告をつぎのようにのべている。

“M., Seguin は、新しい慈善の道を開いた。彼は、後に続く価値ある範例を、衛生学、医学、倫理学に与えた。従って、われわれはこの協議会に提出された報告によって、M., Seguin に感謝状を書いたり、彼の慈善的な事業を激励することは光栄である。”

1844年、パリー科学アカデミーの委員会は、10人の白痴児を試みようとする Seguin の要望を認め、彼はあきらかに、白痴教育の問題を解決したと言明した。Seguin は、彼の後期の著作で、白痴教育の基礎がためとするため、すべての施設の一対の土台として、1842▲年と1843▲▲年の研究報告を参照させた。

1846年、Seguin は規範教本を発表した。それはアカデミーから栄誉を授けられたし、また彼が、人間性に報いた奉仕精神に感謝して、法王 Pius IX から著者に親書がもたらされた。この著

▲ Théorie et pratique de l'éducation de idiots. Two parts. Paris, Baillière. 1841 and 1842.

▲▲ Hygiène et éducation des idiots. Paris, Baillière. 1843.

書で, Seguin は, 白痴教育に生理学的教育と道德教育とを結びつけた彼の教育方法を, 詳細に説明した。彼の教育方法は,

“教育は, 人間や人類における機能として, 道德的, 知的, それに身体的能力を調和的, 効果的に発展させる手段の総体である。生理学的であるためには, 教育はまず, 生命そのものである動きと静止の偉大なる自然の法則に従わねばならない。全ての訓練にこの法則を当てはめると, 各機能は順々に活動と休息につかせられる。すなわち, 一方の機能の活動は他の機能の静止を好都合にする。一方の機能の改善はすべて他の機能の改善に反応する。弛緩の方法ばかりでなく, 理解力の方法もまた対照的である。一般的な訓練には, どんな瞬間でも活用されやすい筋肉的, 模倣的, 神経的, 反射的, 機能を含んでいる。”

と論じている。

Seguin の名声は遠く広く広がったし, 各国の精神病医たちは Seguin によってなされた仕事を参観するためパリへ群れ集まった。しかし, 丁度その時, 1848年の革命となり, Seguin は新制度について疑惑をもっていたため, 荷物をまとめてアメリカへ移住した。彼は普通の開業医として Cleveland に定住し, ついで Ohio 州の Portsmouth へ移った。1860年, 短期間であったが, ペンシルバニアの白痴養護学校長となり, 故国訪問後には, New York 州の Mount Vernon に移った。1861年には, New York 市の大学の医学部が彼に医学博士の学位を授与した時, 彼はその都市に居住することに決意した。そこで彼の生涯の後の20年が過ごされた。

彼がアメリカにきて以来, 彼は精神薄弱児たちの新しい居住治療施設の建設や, 既存のものの改善などに, 相談役として主要な役割を演じた。Seguin は Samuel Gridley Howe を 1852年の初め2ヶ月間訪れて交際した。1873年, 彼は Vienne での万国博覧会のアメリカの教育委員としてヨーロッパへ行った。そして子供の養育, 学校教育, それにハンディキャップ児の保護などについて, 現代的観念の印象について, 説得力のある報告を発表した。

1876年, 6人で白痴と精神薄弱児施設医師協会を設立する相談をまとめ, Seguin は初代の会長として選ばれた。

彼の生涯の最後の事業は, ニューヨーク市の精神薄弱児, 身体虚弱児の生理学的治療学校の設置であった。

専門外の興味として, Seguin は医学的検温に夢中になって, 広く使用される検温器を考案して, 検温についての本を発表している。その一つは, 「お母さんのための検温手引」(1875年)は, 一般大衆向きとして書かたものである。

Seguin は, 1880年10月28日に没した。

(5) Samuel Gridley Howe (1801—1876)

19世紀以前には, アメリカに精神薄弱児を保護する施設はなかった。わずかの試みは, 1818年,

コネチカット (Connecticut) 州のハートフォード (Hartford) に、聾啞者のための保護所が、ごく限られた人たちを収容しているにすぎなかった。

Howe は、1801年に生まれ、Harvard の医学校を1824年に卒業した。早くから盲聾啞児に熱烈な関心をもっていた彼は、盲人のためにニューイングランド保護所を設立するためイングラントへ旅行した。一時ポーランド革命軍に参加し、プロシヤ軍に捕えられ、ベルリンで投獄された。1832年4月に釈放された彼は、帰国後2、3人の盲児を父の家に収容した。陸軍大佐 Thomas Perkins は、彼の熱意に感動して、盲人のための恒久的な施設として、ボストンのパール街にある自分の家と庭園を提供した。この施設は、Howe が1876年に没するまで管現した。Howe はここで、目の見えないものや聾啞者たちの教育に、新しい方法を発展させた。しかも、彼の生徒の一人である Laura Bridgman (聞くことも見ることもできない) に対する教育の驚くべき成功は、彼に国際的な名声を博さしめた。彼は精神に異状のあるものの研究をしている Dorothea Lynde Dix や、教育改革のために戦っている Charles Sumner や Horace Mann と交際した。

障害児に対する Howe の深い関心は、精神薄弱児にも及んでいた。彼の娘 Laura, E. Richards は、“盲人や精神異常者のために彼の労力や研究を進めているうちに、父は白痴や精神薄弱児など同類のものの苦しみや欲求に胸をうたれた。もっとはっきり言えば、父は白痴であり盲である3人の子供に、かなり成功した経験から、精神薄弱児や白痴に実地的な教育の第一歩を進めたのである。父は、“盲である白痴にこれだけのことができるならば、盲でない白痴にはそれ以上のことができる”と推定したのである。

Howe によって心動かされた当時の下院議員の Judge Horatio Boyinton は、1846年1月22日、白痴の状態を調査したり、その数を確かめたり、またその救済方法などを、次の州議会で報告するため、委員会の任用手続きを提案した。上程案は通過し、即日公布された。そこで委員会は委員の任命を行ない、Judge, H. Boyinton ; Howe ; Gilman, Kimball の3名が選ばれた。2年後、これら3人は州の各地域にある町の事務官やその他責任ある人に回状を送り、63ヶ町を訪ね、白痴と宣告をうけたり、理性の欠けた獣性のままにされている人など、574人の状態を調査した。

1848年2月26日、委員たちの第一報が提出された。その中で興味ある2、3を抜粋すると、「Massachusetts 州では、すべて人が教育の恩恵をうける権利を認めている。……盲や聾があれば、州は高価な特殊教育を彼等に与えている。しかし州は、最も哀れな白痴を無視しないであろうか。州は、彼らのために努力しないで、彼等を恐ろしい運命のままにしておかないだろうか? ……」

「人道的、科学的な原理から、こういう人たちのため、学校を建てることによって、彼等が受ける恩恵は非常に大きいものである。その学校に入れられるすべての白痴は、身体的、精神的条件を改善されるばかりでなく、その国や地方の他のすべての人たちが、間接的に利益をうけることであろう。もしその学校が、技術や能力をもった人によって指導されるなら、その他の学校のモデルとなるであろう。白痴は力によって監禁されたり、拘束される必要のないことが例証されるであろう

し、若い者は産業、秩序、自尊心を訓練されることもできるし、醜悪で不潔な習慣から彼等は救い出されるし、エネルギーと技能の指導によって、忍耐と親切で獣性をなくするなどの例証となるであろう。」

2, 3の非難する人もあったが、この報告は深い感銘を与えた。州議会は、10人の白痴児たちの学習指導や訓練のため、3年間、一年につき2,500ドルを支給することに同意した。1848年10月1日、“実験学校”として利用するため、パーキンス施設 (Perkins Institution) が開設された。有能な教師、すなわち後になって、ペンシルバニアで先駆的な仕事をなした James, B. Richard が迎えられた。

3年間の終り頃になって、その場所を訪れた、公立慈善施設連合委員会 (the Joint Committee of Public Charitable Institution) は、“実験は全く成功したと思われる”と報告し、また学校は恒久的な基礎づけをせられるべきであると提示した。施設は、マサチューセット白痴精神薄弱児学校の名前のもとに統合された。快適な用地が1855年、南ボストンに選定された。子供たちは Perkins 施設からここへ移された。Howe は毎日巡視したり、入学のための志願者を検査したり、職員を雇用したり、食事、摂生、規則や規定、しつけや訓練を定めた。1887年、この学校は Waltham に置かれた。最も功績のあった校長の功労を認めて、現在は Walter E. Fernald 州立学校として知られている。

Howe は彼の多忙な生涯の末期まで、盲人、聾人、精神異常者、精神薄弱者などに対する保護教育だけでない。障害児教育のための海外視察から、圧迫に悩む国民に対する関心も強く、ギリシャ独立戦争に従軍したり、ポーランド革命に参加したり、避難民の物資救援、収容所の準備など、多方面にわたる積極的活動の中での生涯であった。しかも、精神薄弱者の訓練や教育は、国民の責任であると同時代の人々に自覚させた点で、彼は精神薄弱者教育の先駆者の一人であろう。

引用文献

- (1) Aegidius Forcellinus : Totus Latinitatis Lexicon. Prati, 1865, s. v. amens.
- (2) Bernstein, I : Jüdische Sprichwörter and Redensarten. Warsaw, J. Kauffmann, 1908, p. 173.
- (3) Gazeau, A. : Les bouffons. Paris, Hachette, 1822.
- (4) Isidorus Hispalensis : Originum seu Etymologiarum libri xx. Augustae Vindelicorum, Zaider, 1742. s. v., fatuus.
- (5) Kirchhoff, T. : Grundriss einer Geschichte der deutschen Irrenpflege. Berlin, August Hirschwald, 1890.
- (6) Laehr, H. : Die Literatur der Psychiatrie, Neurologie und Psychologie von 1459. Berlin, Georg Reimer, 1899.
- (7) Luther, M. : Colloquia Mensalia. London, William Du-Gard, 1652, P. 347.
- (8) ————— : Sämtliche Schriften, Ausgabe von K. E. Förstermann, Band. XXII, PP. 56f., 69f., 70f.

- (9) *Martialis Marcus Valerius : Epigrammata*, X 101.
- (10) Moreau, P. : *Fous et bouffons*. Paris, Bailliére et fils, 1885.
- (11) *Oxford Dictionary of the English Language*, s. v. dunce.
- (12) Skeat, W. W. *An Etymological Dictionary of the English Language*. Oxford, Clarendon Press, 1958, s. v. fool.
- (13) Wallin, J. E. W. : *Education of Mentally Handicapped Children*. New York, Harper and Brothers, 1955. Chapter I : Historical orientation.
- (14) Weygandt, W. : *Idiotie und Imbezillität*. Leipzig, Franz Deuticke, 1915.
—Biographical Data on Pereire—
- (15) Hément, F. J. : *Rodrigues Pereire, premier instituteur des sourds et muets*. Paris, Abbéville, 1875.
- (16) Robinson, V. : *Pereire and His Pupils*. *Med. Leaves*, 3 : 147-156. 1941.
- (17) Seguin, E. : *Jacob Rodrigues Pereire, sur sa vie et ses travaux*. Paris, Bailliére, 1847.
—Biographical Data on Itard—
- (18) Bousquet, J. B. E. : *Éloge historique de Itard*. Paris, Cosson. 1839.
- (19) Kanner, : Itard, Seguin, Howe—Three Pioneers in the Education of Retarded Children. *Am. J. Ment. Deficiency*, 65 : 1-10, 1960.
- (20) Silberstein, R. M., and Irwin, H. : Jean Marc Gaspard, Itard and the Savage of Aveyon : An Unsolved Diagnostic problem in Child Psychiatry. *J. Amer. Acad. Child Psychiat.*, 1 : 314-322, 1962.
—Publications about Guggenbühl and the Abendberg—
- (21) Alther, K. Dr. J. J. : *Guggenbühl und die Anfänge der Schweizerischen Idiotenfürsorge*. St. Gallen, Zollikofersche Buchdruckerei. 1905.
- (22) Anonymus : *Der Cretinismus und das Hospiz auf dem Adenberg*. *Ztschr. f. d. ges. Medizin.* (Hamburg) , 29 : 1-37, 1845.
- (23) ————— : *Du Crétinisme, de son histoire et de son traitement, avec une notice biographique sur le dr. Guggenbühl*. Genève, F. Ramboz 1950.
- (24) ————— : *Fragmentarische Notizen über das Cretinen-Institut auf dem Abendberge*. *Berner Correspondenz-Blatt für Ärzte und Apotheker*, 3 : 97-101, 1852.
- (25) ————— : *Der Apendberg wie er ist. Eine aktenmässige Beleuchtung der bisherigen Wirksamkeit des Guggenbühl*. 23 pp. Berne, J. Gassmann Sohn. 1858.
- (26) Auzouy, M. : *De l'Abenberg et de Guggenbühl son fondateur*. *Ann. méd-psychol.* (Paris) , 4. s. : 9, 450-64, 1867.
- (27) Brown, B. : *The Treatment and Cure of Cretins and Idiots, with an Account of a Visit to the Institution on the Abendberg in Switzerland*. *Am. J. M., Sc., n. s.* 14 : 109-117, 1847 : also Boston, W. T. Tickner, 1847.
- (28) Chambers, R. Dr. : *Guggenbühl's Hospital for Infant Cretins*. *Chambers' Edinburgh Journal*, No. 272, May 1848.
- (29) Chavannes, D. A. : *Des Crétins à l'Abenberg*. *Journal de la société vaudoise d'utilité publique* (Lausanne) , 1844, No. 145.
- (30) Demaria, P. C. : *Dei progressi dell'educazione dei cretini ragguaglio tratto da un recente scritto del dottore Guggenbühl*. *Giornale delle scienze mediche della Reale Accademia*

- Medico-Chirurgica di Torino. Fasc. I, 1854.
- (31) Demme : Über endemischen Cretinismus. Eigenthum der Rettungsanstalt für Cretinen auf dem Abendberg. Bern. Fischer, 1840.
 - (32) Fauconneau-Dufresne : Nouvelles de l'établissement de l'Abendberg pour le traitement et l'éducation des crétins. Union médicale (Paris) . 3 : 129-31, 1849.
 - (33) ————— : Le docteur Guggenbühl et Abendberg. Ibid., 1862, 2s., 14 : 65-71.
 - (34) Forbes, J. : The Physician's Holiday, or a Month in Switzerland in the Summer of 1848. London, W. S. Orr. 1850, 3rd., 1852.
 - (35) Froriep, R. : Die Rettung der Cretinen. Bern, C. Raetzer, 1856.
 - (36) Gaussen, L. : The Abendberg, on Alpine Retreat founded by Dr. Guggenbühl for the Treatment of Infant Cretins. With an introduction by John Coldstream. Edinburgh, W. P. Kennedy. 1848.
 - (37) ————— : The Wonders of the Abendberg. (New edition of the above.) Berne, C. Raetzer. 1857.
 - (38) Gosse, L. A. : Sur le traitement de crétinisme dans l'établissement de l' Abendberg. Ann. méd-psych., 12 : 323-46, 1848.
 - (39) ————— : Rapport sur le traitement du crétinisme. Genève, F. Ramboz. 1848.
 - (40) ————— : Extrait des lettres publiées par le docteur Guggenbühl à Zürich. Genève, F. Ramboz. 1848.
 - (41) Hahn-Hahn, I. : Die Kinder auf dem Abendberg. Berlin, Duncker. 1843.
 - (42) Helferich, J. H. : Das Leben der Cretinen. Stuttgart, 1850.
 - (43) Herckenrath, A. W. F. : Het gesticht voor behoeftige Cretinen-Kindern, opgericht door Dr. Guggenbühl, op den Abendberg, bij Interlaken, in Switzerland, der algemeene belangstelling anbevolen. Amsterdam. Ten Brink & De Vries, 1842.
 - (44) Hungerbühler, J. M. : Bericht sammt Anträgen über die Stiftung für Kretinenkinder auf dem Abendberg, Bern, November 1850.
 - (45) Hutchinson, J. : The Abendberg Hospital for Cretins. M. Times & Gaz. (London) , 1855, n. s., 117-9.
 - (46) Kanner, L. : Johann Jacob Guggenbühl and the Abendberg. Bull. History Med., 33 : 489-502, 1960.
 - (47) Niépce, B. : Traité du goître et du crétinisme. Paris, Bailliére. 1851.
 - (48) Potton, A. : L'Abendberg hospice des enfants crétins dans le canton de Berne. Gazett médicale de Lyon, 5 : 1-5, 1833.
 - (49) Rösh, C. : Die Stiftung für Kretinkinder auf dem Abendberge bei Intertaken in der Schweiz. Stuttgart, Ebner u. Seubert. 1842.
 - (50) ————— : Über Heilung und Erziehung unentwickelter oder kretinischer Kinder, mit besonderer Rücksicht auf die Guggenbühlsche Stiftung, etc. Stuttgart, F. H. Kohler. 1845.
 - (51) Scoutetten, R. H. J. : Une visite à l' Abendberg. Exposé des travaux de Société des sciences médicales de la Mosello (Metz) , 1853, 1-17 ; 2nd ed., Berne, Raetzer. 1856 ; 3rd ed. Berne. 1860.
 - (52) Sengelmann, H. : Idiotophilus. Norden, Diedr. Soltau's Verlag. 1885, vol. 1, pp. 68-78.
 - (53) Twining, W. : Some Account of Cretinism, and the Institution for its Cure on the Aben-

- dberg, near Interlachen, in Switzerland. London, Parker. 1843.
- (54) Valenlin : Schreiben über den Abendberg, mit Anmerkungen von Guggenbühl. Schmidt's Jahrbücher (Leipzig) , 48 : 270-2, 1845.
- (55) Verga, A. : L'Abendberg, Guggenbühl e i cretini. Gazz. med. ital. lomb. (Milano) , 3. s. : 1 : 353, 368, 1851, 3. s. 2 : 1, 25, 65, 89, 109, 125, 1850.
- Biographical Data About Seguin——
- (56) Boyd, W. : From Locke to Montessori. New York, Henry Holt, 1914. Chapter IV : Eduard Seguin, pp. 88- 129.
- (57) Dana, C. L. : The Seguins of New York, Their Careers and Contributions to Science and Education. Annals of Medical History, New York, 1924, 6, 475- 479.
- (58) Holman, H. : Seguin and His Physiological Method of Education. London, Pitman. 1914.
- (59) Kraft, I. : Edouard Seguin and the 19th Century Moral Treatment of Idots. Bull. History Med., 1961, 35, 393-418.
- Biographical Data on Howe——
- (60) Harrington, T. F. : Samuel Gridley Howe. In The Harvard Medical School. New York & Chicago, Lewis Publishing Co. 1905. Vol. II, pp. 741-753.
- (61) Haskell, R. H. : An Apostrophy to the Memory of a Noble American. Am. J. Mental. Deficiency, 49 : 358-363, 1944-5.
- (62) Phalen, J. M. : Dr. Samuel Gridley Howe, a Yankee Cervantes. Military Surgeon, 88 : 553-555, 1941.
- (63) Richard, Laura E. : (Howe's Daughter) : Letters and Journals of Samuel Gridley Howe. Boston, Dana Estes & Co. 1909. Two volumes.
- (64) ————— : Samuel Gridley Howe. New York. Appleton- Century. 1935.
- (65) Schwartz, H. : Samuel Gridley Howe, Social Reformer. Cambridge, Harvard Univ. Press. 1956.
- (66) Williams, F. E. : Dr. Samuel G. Howe and the Beginnings of Work for the Feeble-minded in Massachussetts, Boston Medical and Surgical Journal, 177 : 481-484, 1917.

—— April. 30. 1968.——